I 震災発生からの1ヵ月

2011年3月11日～3月31日

東北地方太平洋沖地震発生

2011年３月11日　14時46分

津波で破壊された浜街道

がれきに埋めつくされた富岡駅前
（写真提供：菅原文宏さん）

天井が落下したリフレ富岡

1　東日本大震災・原子力災害の始まり

国・県・東京電力の動き

３月11日14時49分、気象庁は東日本の太平洋岸一帯に大津波警報を発表、政府は官邸対策室・緊急災害対策本部を設置した。

双葉・大熊両町にまたがる東京電力福島第一原子力発電所では稼働中だった３機が自動停止、外部電源が失われたため非常用ディーゼル発電機が起動するが、津波による原子炉建屋冠水で１～５号機全ての電源を失い、燃料の冷却不能に陥る。同夜19時03分、政府は原子力緊急事態を宣言、原子力災害対策本部と現地対策本部（オフサイトセンター）を設置する。

同20時50分、福島県は東電福島第一原発１号機の半径２㎞の住民に避難指示。21時23分、政府が同半径３㎞以内の住民に避難指示、半径３～10㎞圏内に屋内退避指示を発令する。

富岡町の動き　富岡町災害対策本部設置

11日14時50分、富岡町災害対策本部設置、担当課による地震の被害状況調査と、大津波注警報に基づく町民への避難を呼びかけ、避難所への誘導を急ぐ。15時22分ごろ津波第一波が到来。続いて21.1ｍの大津波が襲い被災地区の救助救急などの対応に追われる。

被災・停電した役場の非常用電源が尽きたため、災害対策本部を隣接する文化交流センター「学びの森」に移し、夜は避難所運営と原発事故に関する情報収集を中心に対策活動を続ける。

平成23年３月11日、金曜日。午前中に中学校の卒業式が行われた。このため、第４次長期総合計画を審議中で週明けが最後のヤマ場というところだった町議会も、この日は休会とされていた。

午後２時46分頃、激しい揺れが襲ってきた。庁舎内では、揺れに反応してすぐに柱にしがみついた町民に「すぐに収まるだろうから心配ないよ」などと職員が声をかけた。ところが、揺れはますます強く、激しく、いつまでも続いた。収まるかと思った直後、さらに強い揺れが襲う。これはただごとではないと感じ始めたころ、庁舎あちこちの天井が少しずつ落ち始めた。庁舎は平成４年築で、耐震は基準以上。構造は大丈夫だが、落ちる天井でけが人が出るかもしれないと不安に陥った。そして、災害対策本部を立ち上げなければと思った。

災害対策本部は２階の正庁に構える決まりだった。しかしそこは当時確定申告のために使われており、そのためのパソコンなどがセットされていた。ここに災害対策本部を構えようとするとそれを撤収しなければならない。無理だ。

災害対策本部は役場２階の小会議室に設けられた。すぐに、道路等の管理を担当する都市整備課など、状況確認の実動部隊となる課が中心になって緊急対策会議が開かれ、分担を確認しながら職員に出動が指示された。

「大津波警報」も出ている。予測到達時間は15時30分。

災害対策で町民への情報伝達を担うのは生活環境課だ。自然災害、地震・津波、そして原子力――。

いち早く伝えたのは津波からの避難だった。国からも連絡が入ったが、今までにない激しい揺れから誰もが大きな津波が来るに違いないと直感していた。過去に出した津波警報ではたいした津波が来なかったが、今回は違う。防災無線担当の生活環境課は町民への避難指示を放送。同時に避難誘導班が編成され、15時25分

3.11からの主な動き

2011
平成23年

3月11日

14:46　三陸沖を震源とする東北地方太平洋沖地震（震度６強、Ｍ９．０）発生
〃　福島県災害対策本部設置

14:49　気象庁が福島県沿岸に大津波警報発令

14:50　**富岡町災害対策本部設置**
大津波警報を受けて町内避難所を開設するとともに、防災無線及び巡回パトロールにより沿岸地域住民を避難誘導
〃　官邸対策室設置、緊急参集チーム召集

15:14　緊急災害対策本部設置（本部長：内閣総理大臣）

15:22　**富岡町に津波第一波到来**

15:27　福島第一原子力発電所に津波第一波到来、原子炉建屋冠水

原子炉建屋冠水

15:35　福島第一原子力発電所に津波第二波到来

15:37　（15：42までの間に）福島第一原発１～５号機全交流電源喪失

15:42　福島第一原発より政府に原災法第10条通報（全交流電源喪失）

16:00　福島県が自衛隊に災害派遣を要請

16:36　福島第一原発１・２号機非常用炉心冷却装置注水不能

16:45　福島第一原発より政府に原災法第15条通報（非常用炉心冷却装置注水不能）

19:03　菅首相、原災法第15条に基づく「原子力緊急事態宣言」を発令。原子力災害対策本部と現地対策本部を設置。

21:23　内閣総理大臣より福島県知事、大熊町長並びに双葉町長に対し、原子力災害対策特別措置法第15条第３項の規定に基づき指示
- **福島第一原発から半径３㎞圏内に避難指示**
- **福島第一原発から半径10㎞圏内に屋内待避指示**

富岡川を遡上する津波第一波

大津波に破壊された富岡漁港

倒壊した店舗

津波の直撃を受けた家屋

天井の梁が落下した富岡町武道館

まで戻ることを申し合わせて現地に向かった。

防災無線は、何度も何度も、繰り返し津波からの避難を呼びかけた。

やがて、ベランダから海の様子を見ていた職員の目に、雑木林の枝を透かして扇状の白波が真っすぐに飛び込んできた。津波の第一波じゃないかという声が上がった。こんな状況は見たこともない、大変なことになる、しっかり構えないと駄目だな、と誰もが思った。

仏浜にある浄化センターに着いた下水道担当職員は、被害はあるものの根幹的な処理能力は確保、機械も動いているのを確認した。そこで集中管理されている他の処理場のデータも送られてきている。どこも大丈夫そうだと思った。「これぐらいでよかった！」と、同行した職員や業務を委託していた会社の作業員らと声をかけ合った。

防災無線放送と車載の防災無線からは、休みなしに「大津波警報」「避難」が呼びかけられている。ここは海から200mぐらいの場所だ。全員「学びの森」に集まってと言いながら作業員を送り出し、同行した職員と門扉を閉めて外へ出た。そこに双葉署のパトロールカーが通りかかり「早く避難して！」と声をかけられた。そのパトカーを追うかっこうで避難した。パトカーは途中から海岸の方に曲がって行った。

役場を目指す途中にある富岡川に架かる橋を渡った。止まりも振り返りもせず庁舎に戻った。途中の高台に向かって必死の形相をした町民が歩いていた。なぜあんなに切迫した顔でいるんだろうと思った。渡った橋を見ていた職員がいて、その数分後に橋は流されたと、後で聞かされた。

後々インターネットで津波の動画を見た。心底ゾッとした。

津波にのまれたパトカーは、あのパトカーだったのだろうか。

乗務していた２人の警察官は殉職。そのうち１人はまだ発見されていない。小浜海岸近くに置かれていたパトカーには多くの人々が花を手向け、のちに震災遺産として町内の岡内東児童公園に設置・保管されることになる。

東日本大震災-地震・津波災害直後の対応・消防団の奔走

富岡町消防団の団長は、勤務先の業務で双葉町石熊地内にいた。強い揺れの中、すぐに富岡町の町内を思い浮かべた。消防団は震度４以上で役場に連絡、対応を確認することになっている。携帯はつながらなかった。だが大きな地震だ、災害対策本部が立ち上げられるはずと判断、バイクにまたがり役場を目指した。道はあちこちで陥没し、亀裂が走り、スピードは出せない。15分ほど走ったころ公衆電話が目に入った。念のためと思ってかけてみると、つながった。役場は「災害対策本部を立ち上げたのですぐ来てくれ」と言う。消防団幹部役員の召集を町に頼み、勤め先に連絡を入れたあと、また走り出した。

消防団幹部は、何かあれば自分の分団員を確認し、連絡をとるよう心得ている。通信網が使えなくなっていたが、何らかの指示が出るはずと、それぞれ役場に向かおうとしていた。

最初に役場に着いた分団長は、役場の裏手に立っていた町長から海岸線を見てきてくれと指示を受けた。連れ合っていた団員と役場を出て、途中、避難所になっていた総合体育館の様子を見るために立ち寄った。そこに双葉地方広域市町村圏組合消防本部職員が来て、「体育館は天井が落ちる可能性があるので住民を出してくれ！」と言う。住民に別の建物に移るよう誘導したあと、あらためて海岸に向かった。

富岡川の川沿いから行こうという者がいたが、「やめろ！」と制して山側の道を行った。

観陽亭のある高台に出て富岡川河口部を見ると、富岡漁港は跡形もなく、川の上流部の一帯は一面水浸しだった。津波はすでに引いていたが、現実とは思えないその光景に言葉を失った。

対策本部に戻って報告。さらに町内の状況を見ようと山麓線（県道35号線）を目指したが、途中道路の陥没があったりで、思うように進めなかった。

津波の第一波が来たのは、消防団長が勤め先への報告を済ませ、災害対策本部に向かおうとした時だったという。15時22分ごろと思われる。小高くなったところにある事務所の下の水田まで波が来ていた。過去の津波を体験した先輩から聞いた話では「一回潮が引いてから来た」という。今回のはいきなり来たと感じた。「これは大きいぞ！」と思った。

くり返し押し寄せる巨大津波（写真提供：大塚博巳さん）

災害対策本部に駆け付けると、消防団６分団で各担当地区の被害状況を把握するよう要請された。まだ本部に来ていない分団には２人の団員が出向いて、指示内容と、報告は各２名ずつで直接本部まで来るよう伝えて回った。

海岸地区の分団からは津波被害と救出活動の状況、山側では溜め池崩壊の恐れがあり住民を避難させているなど、町内の情報が入り始めた。

夕方、辛うじて保っていた役場庁舎の非常電源が切れた。災害対策本部の会議室はたちまち暗くなって会議にならない。隣接する文化交流センター「学びの森」なら自家発電装置があり、なんとかなりそうだということで、その２階に災害対策本部を移すことになった。

情報収集と広報の要である生活環境課は本庁舎に残って業務を続けた。くりかえし余震が襲ってきた。

広報とみおか　桜通信［抄］

岸下克治さん［東京都］
2012年11月号

リフレ富岡で目の当たりにしたパニック状態の光景

あの日（震災発生当日）は昼食後、日課としているトレーニングを行うためリフレ富岡に向かいました。一通りのメニューを終え、水着に着替えてプールへと向かう途中、激しい揺れに襲われました。ガラスや天井が割れ、破片はプールの水面や床に、雨が降るように落下していきました。身を守る術はなく、恐怖すら感じました。地震直後に館内ではスプリンクラーが作動し、裸で逃げ惑う人がいるなどパニック状態でした。幸い私はけがも無く、帰宅の途につくことができましたが、自宅は過ごせる状態ではなかったため、富岡高校に避難しました。

翌朝、避難の知らせを受け、バスで川内村へと向かいました。

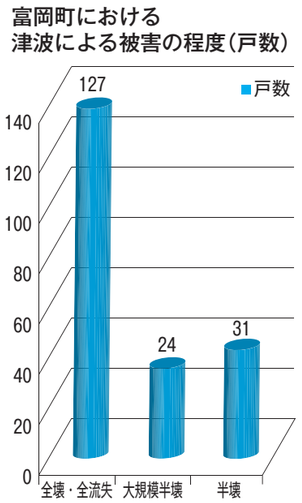
避難開始２日目（３月13日）、せめて車だけでも持ち出そうと、富岡方面に向かいましたが、途中で制止されてしまいました。４日目（３月15日）には、さいたま市に住む長男らが迎えにきたため、川内村を離れ、現在は母や妻とともに東京都内の長女宅に身を寄せています。

私は大学時代を東京で過ごしましたが、高齢となった私たちには決して住み心地の良い環境ではありません。これまで一時立入には毎回参加していますが、自宅も街も荒廃が進む一方です。そうした様子に、もう帰れないのではという絶望感に襲われます。

避難生活の中で沢山の方々から励ましを受けてきました。大学卒業以降、年賀状のやり取りを続けていた同級生たちが、上京の折に会いに来てくれています。

現在は、心と体の健康のため、親類との行楽、各種団体が開催するイベントやサークル活動に参加するなどして毎日を過ごしています。

富岡駅前



避難所の設営

その間、各地区避難所の設営が進められ、役場職員らはその準備に走った。新型インフルエンザ対策で３階に備蓄していた食糧や水を指定された避難所に運ぶのだが、停電でエレベーターが使えない中、何度も階段を昇り降りして持ち出し、避難所に運んだ。発電機など消防団の備品なども持ち出され、運び込まれた。雪混じりの寒さの中、暖を求める声があちこちから上がり、そのたびに町職員や消防団員らが調達に駆け回った。

それぞれの避難所への情報伝達と状況把握のための連絡担当も手分けした。津波被害の実情、確認できない人も含めて約50名が行方不明などの情報が入るたび、災対本部の緊迫感が高まり渦巻いた。

夕闇が濃くなり始めたころ、いわき市に行っていた生活環境課長が災害対策本部に駆けつけた。とにかく人手が足りない状況の中ながら、対策が軌道に乗り始めていた。

その夜、避難所となった富岡高校、夜の森地区にあるリフレ富岡、富岡二小・二中の体育館ほか、各地区集会所などに多くの町民が避難していた。津波被災地区のほか、「余震が続いて怖いのでみんなと一緒にいたい」という人も少なくなかった。

炊き出しなど避難住民のための世話役は、防災訓練では婦人消防隊や社会福祉団体などが当たることになっていた。しかし今回は、そのメンバー自身が被災者となり自己対応に追われ、また家族を守るのに精一杯となり、思うように出動できなかった。その不足分を消防団各分団で補うことになり、津波被害に関係のない地区の団員や町職員らが炊き出しに当たった。電気、水道が断たれた中、プールから水を組んでトイレのタンクに給水するなど、トイレ対策に追われた避難所もあった。避難の現場から突きつけられた、切実な問題の一つだった。

リフレ富岡にもかなりの人が集まっていた。しかし津波被災のあった海岸からは離れていて実感がなかったため、「何時になったら帰れるかな」といった様子だった。停電のため情報が入ってこない。何があったのか、何が起きているのかわからない人が多かった。地震のための避難、地震が収まるまでの間、今晩一晩ここで過ごして、明日は片づけをしなくてはいけないねなどと話し合っていた。確認のため避難所を見に行った町の災害対策の幹部職員が津波の被害の状況を伝えると、「ええっ⁉」と驚きの声が上がった。さらに、「詳しくわからないが原発も大変な状況になっているようだ。どこまで心配なのかはわからないが、今までにない大変な状況なのは間違いない。そういう意味では覚悟してください、落ち着いて行動しましょうね」と話した。

巨大津波で壊滅した駅前仏浜地区（写真提供：菅原文宏さん）

津波の襲来で災害対策本部は騒然となった。ＪＲの職員が「富岡駅が流された」と言っているのが聞き取れた。さまざまな指示が飛び交い、よくわからないまま動いている感じだった。そんな中、避難所用の電源やトイレ、暖房用の燃料の確保を求める声が絶えず、近くにいる若い職員がそのつど走り回っていた。

23時ごろだったろうか、総務課長から職員に「係長以下の職員については、半数は帰宅していいが、明朝８時には集合し交代する。」との指令が告げられた。

富岡駅前

災害対策本部の夜

19：03　原子力緊急事態宣言発令
原子力災害対策本部設置

町と町民らが地震・津波の災害対策に奔走する中、福島第一原子力発電所では次々に深刻な事態が発生、事故が急速に進行していた。

15時42分、東京電力は原子力災害対策特別措置法（原災法）第10条（所内電源喪失）通報、16時45分には第15条報告（非常用炉心装置注水不能）を行う。しかしその時点では、いずれの情報も町には届かず、その日夕方遅くになってようやく少しずつ連絡が来るという状況だった。

これら通報の事実についてはテレビや伝聞などで追認していくことになるのだが、その通報やニュースが何を意味するのか、わかりやすく伝えることばはなく、実感を持って受け止めることができる者もいなかった。「第10条がどういうことで、それが15条になると何なのか、どんな大事な意味を持つのか」の認識がなかったのだ。それよりも「津波で行方不明者が出ている。探さなくては！」という、目の前に広がった災害の対応に追われていた。役

広報とみおか　桜通信［抄］

石井 卓さん［いわき市］
2014年７月号

不思議だった「海の様子」

３月11日午前３時、私は出張先の青森県東通村へ向かうために、部下と町内下千里にある会社を出発しました。途中、海岸線の道路を走っている時にふと海を見ると、何とも言えない不思議な様子の海面が目に入りました。私は、海岸近くの毛萱地区で生まれ育ったため、地域は違えど、海の様子が普通ではないことを敏感に感じたのかもしれません。

現地に到着後、八戸市で遅めの昼食を済ませ東北道まで間もなくという時、ラジオから緊急地震速報が流れ、間もなく大津波警報が発令されるなど想像を超える事態に帰路を急ぎました。

富岡に到着したのは、日付が変わった翌未明。夜が明けて目にしたのは、自宅を含めほぼ全ての世帯が流されてしまった毛萱地区の姿でした。

避難指示により、私は妻と知人と共に、川内を経由して県内の親類宅にお世話になりました。約10日後、社長から会社を再開したいとの連絡があり、３月23日、私は家族と離れいわき市に移りました。会社の拠点となりそうな場所を実際に見ると１階は津波で浸水し、ひどい状態でした。社長の親類宅に従業員らと寝泊りさせていただき、断水のため近くの沢まで水を汲みに行く生活を続け、平成23年４月から当社いわき事務所として本格的な業務を開始しました。

その後、従業員や関係会社の皆さんも徐々に集まってくれました。懇親会を再開しましたが、参加してくれた皆さんから、会社の再開を感謝する数多くの言葉をかけていただき、社長共々うれしい気持ちで一杯でした。

現在、弟が住む白河市内にある仮設住宅で妻と共に生活しています。平日は、従業員数名とともに、いわき事務所２階にある「寄宿舎」で単身赴任生活をしています。

震災当日「学びの森」に設置された災害対策本部
（写真提供：福島民友新聞社）

富岡駅前

場職員、消防団員、そしてほとんどすべての町民が同じだったと言っていいだろう。

だが富岡町の中心部は、第一原発から半径約５～10km、第二原発からは半径５km内という位置関係だ。原発事故に関わる情報収集がにわかに切実な問題となった。真っ暗となった庁舎の中、担当の生活環境課職員は、発電機による明かりにしがみついていた。

町と「第一原発」「第二原発」との間には、こうした事態に備えてのホットライン（極めて重要な連絡を行うための直通電話）があった。だが、現場の混乱からなかなかつながらず、原発の状況把握は困難を極めた。また繋がったとしても専門用語が飛び交い、それが何を意味しているのか判断することは容易ではなく、意味を理解して対策を考えるということは難しい状況にあった。

夜９時過ぎ、第二原発から町の連絡担当として東電社員が２名やってきた。その社員を通して第一原発の情報を得ようとするのだが、彼らにもそれはわからない様子だった。わかっていることとして説明される内容もわかりにくい、技術的な言葉ばかりなのだが、「第一」の状況がどうなっているのかについては、彼ら自身も話せるほどの情報はつかめていないようだった。

夜９時23分には「第一」から半径３km以内に避難、10km以内は屋内退避の指示が出る。

広報とみおか　桜通信［抄］

菊池誠一さん［東京都］
2012年９月号

励ましてきた子供たちから、逆に励まされています

震災が発生した時、私は福島市内におりました。家族と連絡がつかない中、一路、富岡を目指し、福島市内を午後５時に出発しましたが、富岡に着いたのは午後11時頃でした。

停電で真っ暗な中、店や自宅を見て回りました。中はメチャクチャな状態で家族の姿はありませんでしたが、町内の避難所で無事再会できました。しかし、翌朝、避難指示が出されました。当時、新規出店なども含め、事業展開を計画していましたが、全て駄目になってしまいました。

現在、私夫婦と長女は東京都内、両親らはいわき市内と、家族がバラバラの生活を続けています。また、東京で薬剤師としての仕事に就く一方、毎月３回程度いわき市内との往復を続けています。

いわきとの往復を始めた当初は、「いわきにいる避難者のため」と移転開業を考えていましたが、ある人から「商売は、助けるんじゃなくて、皆さんから助けられているんだよ」という言葉にハッと気づかされました。そこで改めて現実と向き合い、地域の人々、家族、従業員（震災後やむを得ず解雇）の幸せのために何ができるのか、しっかりと考え直してみようと思い今日に至っています。避難を始めて以降、それまで励ましてきた子どもたちに逆に励まされるようになりました。かつて私が彼らに「神様は超えられない試練は与えない」という言葉を葉書に書いて送りましたが、その葉書を見せられたり、娘からは「ため息は幸せが逃げるよ」と言葉をかけられたり。

今は、そうした子供たちに何を残せるのか、これからが人生の本番と思い、悩み、行動しながら、毎日を過ごしています。

2　3.12　5：44
半径10km圏内避難指示

国・県・東京電力の動き

３月12日５時22分、富岡町内に位置する第二原発でも１号機の圧力抑制機能喪失（原災法第15条報告）、２・４号機も同報告の事態に至る。７時45分に原子力緊急事態を宣言、第二原発から半径３km圏内に避難指示発令、さらに半径10km圏内まで拡大する（17時39分）。

深夜から格納容器圧力の異常上昇が続いていた第一原発１号機の事態に即して、政府は避難指示を第一原発から半径10km圏内にまで拡大（５時44分）。同１号機のベント（蒸気放出）を行うが15時36分に水素爆発。避難指示を第一原発から半径20km圏内にまで拡大する。２号機・３号機もベントなどで対応するも、事態の悪化は止まらない。。

14日11時01分、第一原発３号機水素爆発。午後には同２号機の事態が急速に悪化、18時22分には燃料棒が完全に露出、格納容器圧力が異常上昇する。

富岡町の動き

６時00分、テレビ報道で避難指示の半径10km圏内への拡大を確認。災害対策本部は原子力災害への対応に主眼を転換、川内村への避難を決定する。

６時50分、川内村に受入を要請、受諾。防災無線などで町民に避難を呼びかける。８時00分、町のマイクロバスや自家用車により避難を開始する。

同日16時、川内村に同村との合同災害対策本部を設置。数少ない職員で、村内避難所の対応と村外に分散した町民の安否確認などに当たる。

3.11からの主な動き

2011（平成23）年

3月12日

- **3:00** オフサイトセンターの電源復旧、事故対応活動開始
- **5:22** 福島第二原発１号機の圧力抑制機能が喪失する事態が発生（原災法第15条事象発生報告）→２号機→４号機
- **5:44 菅首相、第一原発から半径10km圏内の住民に避難指示**
- **6:00** 細野補佐官が大熊町長に半径10km避難指示を伝達（浪江町、富岡町、楢葉町には連絡なし。テレビ報道により確認）
  富岡町、町民の川内村への避難を決定
- **6:07** 福島第二原発４号機圧力抑制機能喪失
- **6:50 川内村へ避難受入れを要請、防災無線で町民に呼びかけ**
- **7:11** 菅首相がヘリで福島第一原発に到着
- **7:45** 福島第二原発に「原子力緊急事態宣言」発令
- **8:00** 富岡町民6,000人、マイクロバスで川内村へ避難
- **10:17** 福島第一原発１号機でベント開始
- **15:36 福島第一原発１号機で水素爆発**
- **16:00 災害対策本部を川内村に移転、川内村と合同の対策本部を設置**
- **17:39 政府、第二原発から半径10km圏内の住民へ避難指示**
- **18:25 第一原発の避難指示区域を10km圏内から20km圏内に拡大**
- **19:04** １号機原子炉へ海水注入を開始

原子力災害-川内村へ全町避難（3.12－3.14）

３月12日、土曜日。「学びの森」で夜を過ごした下水道担当職員は、空が明るくなるとすぐ、昨日一緒だった職員と二人で富岡浄化センターの確認に出た。しかし富岡駅前まで来ると、津波に破壊され流されたガレキが道を塞いでいて、それ以上進めなくなった。歩いてなら行けそうかなと車を降りると、凄まじい破壊の光景に圧倒され、引き返した。

災害対策本部の様子が変わっていた。東京電力の第一原子力発電所の事故で避難が必要だと言う。

消防団は朝８時に集合して津波で流された人の捜索と瓦礫の片付けをしようと申し合わせていた。人命救助優先の態勢だ。

「学びの森」の災対本部で夜を明かした町消防団長は、大熊町隣接地区にある自宅に着替えに戻った。６時ちょっと前だった。すると大熊町の方からサイレンの音や避難指示、集合場所を伝える防災無線など、ただならぬ様子が伝わってきた。驚いて本部に戻りそのことを伝えると「今、県の車が避難しろ！と走って行った」という。午前５時44分、避難指示が第一原発から半径10km圏内へと拡大されていた。それまで静かだった「第二」からも15条報告が相

爆発後の１号機

JR富岡保線区

川内村へと続く避難者の車列

避難路も大きな被害を受けた（県道35号線※山麓線）

次ぎ、災害対策はいきなり全町避難へと切り替わった。

消防団員もすぐに緊急召集された。寝耳に水だった。

津波に遭ってるのに原発事故だから避難？　災対本部でも思ってもみない事態だった。その時までは、津波被害の現状把握と救助捜索ばかりを考えていた。１日あればその状況がわかるだろう。13日ごろからは後片づけ……。だが避難となり、そうしたことは何もできなくなった。

第一原発が危ないことは認識し情報把握には努めていた。しかし、避難しろと言われるまでになるとは思ってもみなかった。そしてこの時点でさえ、２～３日避難すれば戻れるだろうというぐらいの認識だった。

その避難先をどこにするか？　国道６号決壊の情報が入っていた。「福島第二原発」も危ないようなので南はない。西か北。川内村しかないだろうということになった。

12日６時50分、遠藤町長（当時）から川内村長に避難受入要請の電話をかける。この電話に川内村総務課長が出て、受入を即断。この時点で富岡町・川内村合同災害対策本部がスタートした。

全町避難？――今まで屋内退避や町内の体育館への避難訓練しか経験のない町民に、突然「町外への避難」を呼びかけるのはきつすぎるとの思いが湧いた。事態の深刻さを実感できなかったせいもあって、「万が一」「念のため」避難をという抑えた呼びかけになった。

「全町民、念のため川内村に避難してください」。

防災無線はバッテリーが切れてしまったのを発電機につないで何とか維持している状態だった。だが、やはり調子がおかしい。これでは届かないと思われた。そんな状態を察して「車両広報しましょうよ」と申し出があった。役場の広報車と消防団とで避難広報に出た。

広報車はそれから午後の４時ぐらいまで、町内を回り続けた。途中で爆発のような音を聞いた。「原発、爆発したんじゃねえ？」「そんなことねえべっ！」。町民に避難指示を出しながらも、切迫感は感じていなかった。避難広報も「念のため」としていた。本部にいながら何の情報も持っていなかった。停電でテレビも見ることができずに夜を過ごした町民もまた、まったく情報がないまま避難の指示を受けた。「２～３日で帰れるかな」というぐらいの気持ちで、とり急ぎ、着の身着のまま避難指示に応じた。

富岡町の皆さまと
- message -

川内村長
遠藤　雄幸

2011年３月11日巨大地震が襲った。翌12日早朝「原発の様子がおかしいので川内に避難させてほしい」と遠藤町長（当時）から電話、ふと外を見ると、数珠つなぎの車列に目を疑った。放射能と先が見えない避難生活との戦いが始まった。少ない情報と恐怖感、不安感で痺れるような時間を８千人の富岡町民と共に過ごし、小雪が散らつく中、ビッグパレットに辿り着いたのが16日の深夜。合同で災害対策本部を立ち上げ、全ての避難者が仮設住宅や借り上げ住宅に入るまで同じ釜の飯を食い苦労を共にした。

原発事故から１年。「私たちは人間が制御できない科学技術の発展により、大切な故郷と母校を失った。しかし、天を恨まず、自らの運命は自らの力で切り開いていく」。富岡高校卒業生の答辞に頭を殴られたような衝撃を受けると同時に、胸が熱くなった。必ず復興する、しなきゃいけないと、子ども達に背中を押された。

富岡と川内、先人たちが脈々と築いてきた姉妹関係、親戚や友人も多い。運命共同体と言っても過言ではない。川内だけが復興すればいいという訳にはいかない。隣人友人である富岡町が復興することが川内村の復興でもある。そのためにはどんなことでもする。長期戦は覚悟している。共に戦っていきたい。

3.11 からの主な動き

2011（平成23）年

3月13日

- **5:22** 福島第一原発３号機の全注水機能喪失のため、電源及び注水機能の回復作業を実施
- **9:30** 県知事より、大熊町・双葉町・富岡町・浪江町に対し、原災法に基づく放射線除染スクリーニングの内容についての指示
- **13:12** 福島第一原発３号機の海水注入開始
- **20:20** 東電記者会見、清水正孝社長が事故後初めての会見で事故を謝罪

3月14日

- **6:01** 福島第一原発３号機格納容器圧力が上昇
- **11:01** **３号機で水素爆発**
- **13:25** ２号機も格納容器冷却機能を喪失
- **16:34** ２号機　消火系ラインから海水注入開始
- **18:22** ２号機　燃料棒全面露出
- **21:37** 福島第一原発正門付近で3.130ミリシーベルト/h観測
- **22:07** 福島第一原発の10km南で、9.6マイクロシーベルト/h観測
- **22:50** ２号機格納容器圧力異常上昇

バスがない

どうやって避難するか。考えたこともなかった全町避難だ。限られた地区を対象に行っていた原発災害訓練では、町が手配したバスに役場職員が何人か付いて避難することになっていた。しかし一度に全町民、16,000人。考えてはみたが現実感がない。ともあれ、自分の車がある町民はそれで行ってもらうしかないだろう。だが施設入居者など交通手段を持たない町民の移送には、どうしてもバスが必要だ。

手配をし始めてすぐ、すでにほとんどのバスが他の町に押さえられていることがわかった（後に、国によって調達されていたことが判明）。後手に回ってしまったとの思いをかみしめながらさらに探すと、楢葉町の会社１社がなんとかきてくれそうだ。だが２～３台。足りない分は町のバス、さらに町内の会社のバスを借りるなどして、集められるだけ集めた。こうした状況を町民にも伝え、自家用車に乗り合わせての避難協力を呼びかけた。

広報とみおか　桜通信［抄］

磯村福治さん［栃木県］
2012年９月号

何もしなければ、自分たちが駄目になる

富岡町に来て約40年、こうした日が来るとは思いませんでした。私たち夫婦は愛知県出身ですが、私の勤務先が富岡町に進出するのに伴って富岡町に来ました。

震災発生当時、私は楢葉町内の事務所、妻は町内西原の自宅にいました。事務所、自宅とも、建物が大きく壊れるようなことはありませんでした。

私は、勤務先で東北地区を担当する役員（当時）をしていましたので、各地の現場に出ている社員の安否確認などを行い、午後８時頃帰宅しました。

翌日は、朝から自宅の片付けをしていましたが、近所に人の気配が無いことで初めて異常に気づき、避難を開始しました。川内村に向かい、同村に住む部下の世話で手古岡の公民館にお世話になりましたが、16日の全村避難を受けて、一旦郡山に移動し、娘夫婦の住む小山市へ向かい現在に至っています。

一時帰宅にもこれまで参加してきましたが、自宅の中にはネズミやヘビが入り込み荒れ果ててしまいました。修理したからといって簡単に住めるような状態にはありません。

この小山市へ避難した翌日（2011年３月17日）から勤務先の東京本社に通勤していましたが、仕事に目処がついたため、同年８月に引退しました。

仕事を引退し１年になりますが、何もしなければ自分たちが駄目になる、それこそ「自立」どころではないと思い、外向きな性格も手伝って、地域の皆さんとともに陶芸をはじめたり、郡山市やいわき市を頻繁に訪れて、所属するロータリークラブのメンバー達と交流したり、評議員を務める東洋学園の運営を手伝ったりしています。また、栃木県内の避難者同士の交流などにも関わる、そうした日々を過ごしています。

富岡浄化センター

麓山神社

地震被害

地震被害

町民が一斉に川内村を目指して動き始めた。道は県道小野富岡線一本だけだ。たちまち渋滞し、流れは止まった。

この状況を見て警察は、北に向かって国道288号に出るよう誘導した。ここから町民はバラバラに散り始めた。川内村に入ったものの村内の収容がいっぱいで、さらに先へと向かった町民も多かった。最終的に川内村に避難した町民は、全町民の約半数にあたる8,000人弱といったところ。さらに三春町をはじめとする周辺市町村に5,000人以上が避難していった。

通常なら30分で着く川内村に３～４時間以上もかかった渋滞は、町民の一斉避難のため起きたもので夕方には解消したのだが、いわば起こるべくして起きた事態だった。ガス欠となった車の放置さえ大きな障害となる細い一本道の脆弱さが露呈された様子を見て「だから言ってきたじゃないか」とほぞを噛んだ町職員が、少なからずいた。過去に行われた原発事故防災訓練に参加した自衛隊員から「あそこ（小野富岡線）を自衛隊の車両が救出に行ったら逆に住民は避難できない。道を直さないといけない。国道114号、国道288号、小野富岡、この３本は絶対直さないと救出に向かえない」と言われたことがあらためて思い出されたのだ。

もとより道路の拡張整備は、町としても原発建設以来要望してきたことの一つだった。しかし経済効果をタテに聞き入れられなかった。経済効果じゃない、ここは原発を背負っていて万一何かあったら大変なんだから、そのための機能が必要なんだ。だがその話は、40年来全然進まなかった。何のための防災訓練だったんだ、言ってた通りになってしまったじゃないか……。

その防災訓練は、「第二」あるいは「第一」から５～10㎞範囲を対象に、10㎞内の住民には屋内退避するよう広報して回り、３～５㎞の範囲に住む住民は避難。自衛隊が出動し、町内に設置された避難所の体育館まで送ってもらい、スクリーニングを受け、「収束」したので帰宅、というもの。今回の「避難」という事態はその防災訓練感覚で受け止められた。その限りでは無意味ではなかったが、全町避難だ。半信半疑だった。

災対本部で記録を担当していた職員は、朝から風向きを気にしていた。誰に言われるともなく、放射能の状態、風向、風速を伝えていた。海からの風がぐるぐる回っている感じだった。だが、風が弱いので川内の方は大丈夫かな、と見ていた。

午後３時過ぎ、朝からの避難誘導に応じた住民をピストン移送していた最後の便を送り出すと、災対本部と生活環境課職員だけを残して他の職員も川内村への移動を開始した。

午後３時36分。本庁舎内に保管してあったタイベックスーツ（放射性物質簡易防護服）を運んで「学びの森」に入ろうとしていた原子力安全係長と出納室長は、「パン！」という大きな音を聞いた。「第一」の方角からだった。中に入ると、幹部らは防護服を着て安定ヨウ素剤を配っていた。生活環境課職員はさらに情報収集を続けるが、詳しいことは依然わからないまま、17時過ぎ、災対本部と共に川内村に向かった。

川内村にて

富岡町・川内村合同災害対策本部

「学びの森」を最後に出た災対本部幹部らはタイベックスーツを着たままだった。線量も何も全くわからないまま、あの爆発音を聞いて、一緒にいた東電職員の見よう見まねで着込んだものだった。タイベックスーツと黄色いカッパ上下があって、本来ならタイベックの上にカッパを羽織るのだが、着る順番がわからず、白いタイベックのイメージがあったため、逆に着ようとして体が入らない人もいた。川内の灯りが見えたところで、一行は車を止めた。「この格好で入っていくのはまずいだろう」と、誰が言うともなくそれを脱いだ。

富岡町の避難を受け入れた川内村の集会所などの施設には、前日の地震で避難した村民がいた。だがこの日の朝、富岡町の受け入れを決めたことで、村民は自宅に戻ったのだった。川内村小学校、富岡高校川内分校、いわなの郷といった施設と、各地区の集会所等が避難所（当所19ヵ所）として、富岡町民優先で開放された。入りきれずに車の中で過ごした人など多くの町民がお世話になった。

しかし、残りの約一万人の町民はどこに行ったのか？　また原発災害訓練のマニュアルが思い起こされた。避難バスには「職員が何人か付いて……」。もとより無理な話だったのだが、頭の中でジュッと音がした気がした。

12日の夕方、最後に川内村に入った災対本部幹部と遠藤町長（当時）は、避難所を見回りながら町民に声をかけて回った。その中で、「いつ帰れるんだ」「こうなったのはお前らのせいだ」などの声も浴びる。耐えることの始まりだった。

全町避難で雑草が生い茂った中央商店街

夜になって、避難にあたり県に要請していた食料、布団や毛布などの物資を運んで自衛隊が到着した。何も情報が得られず、連絡も思うように取れない中、格別に心強く感じられたうれしい来訪者だった。

その夜も寒かった。村役場の中に置かれた合同災対本部に詰める幹部らは、通路のコンクリートの上で仮眠するような状況だった。しかし翌日になると、村民から布団や毛布が差し入れられ、炊きだし、おにぎりなど、さまざまに手を尽くしての村民の受け入れが、疲れを感じ始めていた町民を暖めてくれた。

避難所とされた村内の施設には町職員が担当として割り振られた。「いわなの里」に入った職員は、温かいみそ汁や温かいおにぎりの夕食を出されて、避難してきたことを忘れるほどくつろぐ町民を目にする。自分もまた、そこでやっと第一原発の状況をテレビで見て、この避難の切迫性を理解していた。そんな時、避難者の健康状態を見るため各避難所を巡回していた保健師から、

広報とみおか　桜通信［抄］

渡邉カツ子さん［守谷市］
2012年５月号

思い出の桜染めを、もう一度

富岡で生活していたときは、新町「さつき会」の老人会長を務めておりました。桜の委員会のボランティアにも参加し、さつき会のみんなと桜染めのブローチやリースを作って桜祭りで販売したり、落ち葉清掃などをしていたのが懐かしく思います。

今回の震災で、自宅は２階の屋根やベランダが落下するなどの被害を受け、全壊してしまいました。思い出の写真も持ち出せずとても残念です。

震災の翌日早朝、避難の指示を受け主人の実家がある川内村の毛戸へ向かいました。昼頃に到着したのですが、まもなく原発が爆発し、20キロ圏内だったその地区も避難対象になってしまいました。ほどなく消防団員の人たちから避難指示の知らせを受け、川内小学校に向かい数日を過ごした後、いわきの親戚のもとに向かいましたがすでに避難した後でした。そのため、思い切って娘のいる茨城県守谷市に向かい今日に至っています。

昨年４月、転んで足を骨折し、今もリハビリ生活を続けています。娘が看護師をしているので、けがや病気など何かあっても安心できるのが幸いです。

今は、近くの公民館に行くのが楽しみで、健康体操やハーモニカクラブで友達が出来ました。

最近は、富岡で以前やっていた「桜染め」をもう一度始めています。守谷の桜の葉をいただき、桜の染め液を作ってパンフラワーの粘土に練り込み、桜の花のリース作りにチャレンジしています。

避難生活も、すでに１年を超えました。避難指示が出されたころは、せいぜい数日と思っていましたが…。踊りや三味線や老人会の皆さんに会えなくなったことが一番辛いです。

「川内小学校がパニック寸前だ」という話を聞かされた。「いわなの里」には３人の職員が配属されていたが、この様子なら心配ないと判断して、応援のつもりで行ってみることにした。

川内小学校に着いてみると、教職員らが食事のパンを配っているところだった。その中に町職員は見当たらない。長い行列を縫うようにして探すと、校舎と体育館の間の昇降口で入所受付をしていた。続々と入ってくる町民の名前を聞いて、空いてる場所の有無を確認・調整する。その対応で手一杯で、避難所の運営は教職員の方だけでやってもらっていた。その時点で約1,500人がいるとのことだった。川内小学校の教職員が昼夜問わず対応してくれていたが、避難者の数が多すぎて追いつかなかった。

追いつかないのは食事の数もそうだった。災害対策本部給食担当は、ひたすら米をといでおにぎりを作ったが、小学校に集まった数には追いつかず、当初は一日一食の状態が続いたのだ。運不運とはいえ、公民館や小さな集会所に入った人との差が大きくついてしまった。誰もが気が立っている中、こうしたことを背景に苦情トラブルも増え、また問題行動なども目立ち始めた。

食事の回数については、学校の家庭科室で町民自身が作るなどの対策も出され、次第に定時配給できるようになった。

また、出てくる問題を解決する最も大きな力は、町民自身だということも小学校の避難所から見えてきたことだった。トイレ掃除や片づけという作業の必要について、校内放送で「ボランティアでいろんな作業に参加しませんか？」と呼びかけると、120～130人が集まってくれた。その中の２～３人に見当をつけて「４～５人のグループを作って、気がついた作業をしてもらうということで、割り振りも全部お願いしますね」と話すと、あとは自立的に活動が進められたのだ。同じ会社に勤める人同士の目をみはるような機動力など、表立たなくても同じ発想で気づき、自ら動いてくれた町民も少なくなかった。

小学校に入った町民にとってのいちばんの幸運は、全館暖房だった事ではないだろうか。寒い思いをせずに過ごすことが出来た。

川内村に避難した町民は町職員と一緒なので状況把握も進んだ。だが他の人たちはどこで、どうしているか？

受け入れた先から、連絡が入り始めた。「これだけの町民が来ているんだが町職員が誰もいない。誰か派遣してくれないか」と言う。２人組で派遣したが手が足りない。いるはずの職員がいない。

避難した先々で、町民は心を込めた受け入れと支援を受けていた。大越町などでは布団などが用意されており、いわく言いがたい原発事故災害の記憶のなか避難先で受けたこうした温かさは、その後も町民の心を暖め、励ましとなっている。大きな救いだった。

川内村に落ち着いた町民には、念のため「安定ヨウ素剤」が配布された。本来は国・県の指示で配布・服用されることになっていたが、第一原発の１号機爆発直後から、町民の間には被ばくの不安が一気に高まっていた。その不安に応えるかたちで、希望者に配ったものだった。配布に際しては、配布は町独自の判断であること、本来は医者の診断で服用するものであること、子どもには半分にすることなどを説明し、服用するしないはそれぞれが判断してほしいことを伝えた。後の調べでは、手にしたほとんどの人が服用したものと思われた。

広報とみおか　桜通信［抄］

五十嵐国宏さん［郡山市］
2014年10月号

生活再建と子どもたちの将来のために

私は、いわき市に本社がある自動車部品販売会社に勤務し、被災当時は富岡町内にある営業所に所属していました。営業担当ということで、事務所にいるよりお客様のもとに出ていることのほうが多いのですが、その日は午後から事務所内での仕事にあたっていました。

大地震が発生した時、所長以下６名のうち４名が営業所におり、危険を感じたため外に出て揺れが収まるのを待ちました。勤務していたスタッフは、一人ずつ交代で自宅の様子を見に行きました。私の妻と生後間もない長男は、自宅近くにある妻の実家におりましたが無事でした。

翌朝、避難により川内村に向かいましたが妻と長男の安全を第一に考え、その日のうちに猪苗代町内にある父の実家に移り、約１ヵ月お世話になりました。

避難後、可能かすら分からない帰還のタイミングを待つといったような考えはありませんでした。子どものためにも私が仕事に復帰して、いかに早く「平常な生活」を取戻すかを考えました。そこで、郡山市内にアパートを借り、平成23年４月から生活を始めました。また、私は本宮市内の営業所で勤務を再開しました。

避難後、警戒区域の設定前を含め、何度か自宅に立入りしました。その度に、以前のように自宅で生活したいと思います。こちらでの生活を始めてからは、避難者としてではなく、地域の一員として、地域活動にも参加するようにしています。

今年６月、次男が誕生しました。息子たちは２人とも「故郷・富岡」を知りませんが、今後、成長に伴う理解に応じて、故郷について教えていこうと考えています。

3　3.15 11：00 避難指示区域拡大

国・県・東京電力の動き

３月15日６時10分、ベント操作などにより事態の深刻化に対応していた第一原発２号機の圧力抑制室付近で「異音」が発生。前後して同４号機建屋でも爆発が起こるなど異変が相次ぐ。

10時22分、同３号機周辺で400ミリシーベルトの線量が測定される。10時59分、第一原発から約５㎞しか離れていないオフサイトセンターに退避命令、現地対策本部は福島市に移転する。被ばくを怖れる物流業者が福島県内への物資輸送を拒むという例が相次いだため、福島県は政府に「県全体が汚染されているかのような印象を払拭する正確な情報発信を」と要望する。

富岡町の動き

避難の原因となった原発事故の情報はテレビ頼みだったが、最悪の局面を迎えていることが関係機関や町民の動きから伝わって、災害対策本部は騒然となる。情報が錯綜する中、富岡町・川内村合同対策本部は川内村からの避難を決め、避難先の確保を県に要請する。しかし町民らの実情に即した回答が得られなかったため、独自に郡山市の「ビッグパレットふくしま」に避難受入を請い、承諾を得る。

３月16日、町民の移送に必要なバスの配車に応じてくれる業者がなく、前年（平成22年）11月に友好都市の提携を結んだばかりだった埼玉県杉戸町に支援を請い７台の配車を受ける。

13日の朝になると、どこからも情報が入らなくなった。最初のうちはつながっていた普通の電話も、なぜかつながらなくなった。携帯電話もだめだった。国、県、東京電力、マスコミメディアも入って来なかった。全く孤立したような気分に襲われた。来てくれたのは自衛隊だけとの思いが募った。

メディアが一切接触してこないのもこたえた。訴えたいことがいっぱいあった。第一に赤ちゃんのミルクが欲しかった。買いに行こうにも公用車も燃料もない。おむつも欲しい。メディアから発信してもらえれば届くかもしれない。そんな思いではらわたが煮えくりかえりそうになっている幹部もいた。

そんなところへ、ある町議が顔を見せた。「粉ミルクがなくて困った。どうしたらいいんだろう」という話をした。それから４～５時間後、彼は粉ミルクを抱えて戻ってきた。「いや、大人なら我慢しろと言われてできるけど、赤ん坊は我慢できないぞ」などと言う。知り合いから燃料をもらったりしながら須賀川市辺りまでずっと探して調達してきてくれた。すぐ赤ちゃんのところに届けてもらった。ありがたかった。

13日の夕方、県災対本部から衛星携帯電話一式が届く。

14日、午前11時01分、３号機で水素爆発。衛星電話で遠藤町長（当時）が国に状況をたずねたが「大丈夫だから、大丈夫だから」、「そこからはもう避難することはないから」。「本当なんだね、大丈夫なんだね。町民を抱えているんだからね」といった問答を繰り返した。

15日早朝、２号機、４号機と「第一原発」の事故は拡大。

独自の情報を得て自主的に避難移動する町民が増えていった。

東電で働く仲間から「早く逃げないとダメだ！」との情報を受け取った消防団員がいた。それを災対本部に伝えたが「いや大丈夫だ」と押し問答になった。

「国が安全だと言ってるんだから」

「いやダメだって情報が入ってきてるんだ！」

仲裁に入るほどの言い合いになった。

国の言い方は刻々と変わっていた。だが「さっき言ったことを訂正します」というようなことで意味がつかめないことに変わりはなかった。災対本部はパニックめいた様子になっていった。

11時には昨日まで半径20㎞圏内だった屋内避難指示が、半径30㎞圏内に拡大された。

災害対策本部では、「これはだめだ」という判断になった。国が大丈夫だと言っているので、ここからの避難移動

3.11 からの主な動き

2011（平成23）年

3月15日

6:10　福島第一原発２号機にて圧力抑制室付近で異音が発生
圧力抑制室（サプレッションプール）に損傷

6:14　福島第一原発４号機核燃料貯蔵プール付近で爆発

9:30　４号機建屋の４階付近より出火を確認

10:59　オフサイトセンターに退避命令

11:00　福島第一原発から半径20㎞から30㎞圏内の住民に対する屋内退避を指示

11:13　福島第一原発３号機３号機付近で最大400ミリシーベルト/ｈの計測結果（1ミリシーベルトは1000マイクロシーベルトに相当）
・福島県災害対策本部、県内すべての避難所で被ばく検査を開始

11:59　国土交通省は福島第一原発の半径30㎞圏内の上空を高度に関わらず飛行禁止区域に設定

3月16日

富岡町と川内村の住民約5,000人が郡山市のビッグパレットふくしまなどに避難
・県知事、物流業者が県内への物資輸送を拒む例があるとし、菅首相に正確な情報発信を求める要望
・埼玉県杉戸町が避難用バス７台を手配

3月17日
埼玉県杉戸町からのバス７台により、一部町民が杉戸町・宮代町・幸手市に避難

福島第一原発３号機への放水作業

は町の判断、村の判断だった。

午後１時、川内村は防災無線で「自分で動ける村民は自主避難を」の指示を流す。富岡・川内の幹部は避難先を探り続けた。

決定的ともいうべき放射能汚染がこの日にあったことをみんなが知るのは、１カ月以上も後になってだ。逃げた先によって、あるいはその日の風向き一つで、今日の運命はさらに変わっていたのだと。

3.16ビッグパレットふくしまへ バスは杉戸町から

どこに避難すればいいのか？　県では南会津と群馬県の片品の方へと言っていた。だが、この寒さの中南会津に向かったら、避難所暮らしで体が弱った高齢者は耐えられない。しかもピストン輸送するとしても時間がかかりすぎる。「会津は無理だ、何とかならないのか」と語気を強めて県と押し問答をしていた遠藤町長が「わかった、もう頼まない」と電話を切った。そして以前から親交のあった県職員が館長を務めていた「ビッグパレットふくしま」(以下、ビッグパレット)に電話をした。泊まり込みで施設の被害対策に当たっていた館長本人が、たまたまその電話を取った。遠藤町長が事情を話し「頼む！」と言うと、二つ返事で引き受けてくれた。「自分が責任を持つから」との英断だった。

川内村と一緒に郡山市へ、「ビッグパレット」へと避難することが決まった。

だが、またしてもバスの手配がつかなかった。バスがあっても「運転手が行かない、バスを動かせない」という。公用のバスだけでは１日では終わらない。思い余って友好都市を結んでいた埼玉県杉戸町の古谷町長に連絡してみた。すると「すぐに手配する」と、７台のバスを用意し、差し向けてくれた。

ほっとしながらも、複雑な思いが湧いた。県内の人は誰も来ないのに、県外は迎えにきてくれる……。

川内小学校では各教室にテレビがある。入った日はそれをつけっぱなしで夜通し起きているような状況だった。翌日、持ち場職員は「何かあったら知らせますから、夜12時になったら消そう」と約束し、避難者らも了解した。

福島第一原発２号機・３号機・４号機

14日深夜、２号機の燃料棒全体が露出したというニュースが入った。約束なので知らせないわけにはいかない。パニックに近い形になることも覚悟して、校内放送をした。ここにとどめておくのが自分の役目じゃない。本来、個々に行動しているはずの避難、たまたまみんなで一緒にここにいるだけだ。それぞれ、動けるうちに動いた方がいいと思った。

「皆さんテレビを見てください！」

東京電力の職員や原発関係の企業の住民もいた。ニュースで伝えていることがどういうことで、どうなるのか、想像がつく。真っ先に動き始めた人がいた。それを追うようにして出て行く人が続き、1,500人いた入所者が一気に約半分になった。

杉戸町からの最初のバスが小学校に着いたのは、16日午後３時ごろだったか。昇降口から近い場所(教室)にいた人から順に、バスへの乗車を案内してビッグパレットに向かった。最終は夜７～８時だったと記憶している。最後に職員でざっと片付け、掃除、戸締まりをして歩いた。

黒板に「教室を貸してくれたり、お世話をしてくれてありがとう。本当にたすかりました」「汚したままでゴメンナサイ」などと書かれていた。子どもたちが書き残したもののようだった。なんだかホッとした。

「ビッグパレット」に最初に着いたのは、「いわなの郷」から出た先発隊だった。午後１時ごろだった。しかし、まだビッグパレットの方の受け入れ準備ができていなかった。川内村の受け入れを先にするので、富岡町は待って欲しいとのことだった。朝、急に決まった受け入れだ。施設内部の応急整備やスクリーニング体制など、受け入れ体制が整う前に着いてしまったのだった。

「いわなの郷」にいた担当職員には、ここはバスの手配が一番最後になるという連絡が伝えられていた。何時になるかわからない、夜になるだろう。避難者の数は、最初は400人ほどいたが少しずつ減り、前日の「半径30km圏内」が出た時点で多くの町民が自力避難して行った。残っていたのは約100人くらいだった。それらの町民に「ここからの移動は夜になりそうだ」と伝えると、車を持っている人が多いようなので、分乗し合って、とりあえず逃げようという話になった。

消防団員と職員が、協力してもらえる車の状況、車がない人を調べ、先に避難するグループをつくった。その結果14～15台の分乗先発隊ができ、それが最初にビッグパレットに着いた富岡町民だった。

ビッグパレットの建物も大きな損傷を被っていた。また、郡山市の指定避難所として、震災後、市内の高齢者など200～300人の避難者を受け入れ、郡山市の担当職員も付いていた。しかしこの日、川内・富岡からの避難受け入れとなり急きょ撤退。替わってその10倍の数を受け入れるため、総員12人の職員が準備に駆け回ってくれていた。

川内小学校

富岡町の皆さまに
- message -

杉戸町長
古谷　松雄

東日本大震災及び東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故により、現在も古里を離れて生活されている富岡町民の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

平成８年頃から交流を重ねてきた富岡町と当町は、平成22年11月に友好都市となりました。地震発生直後、「家族」も同然の富岡町が原発事故によって苦境に立たされていることを知った私は、支援物資の搬送のほか、大型バス７台を手配し多くの方が避難する川内村へ向けて職員を派遣しました。

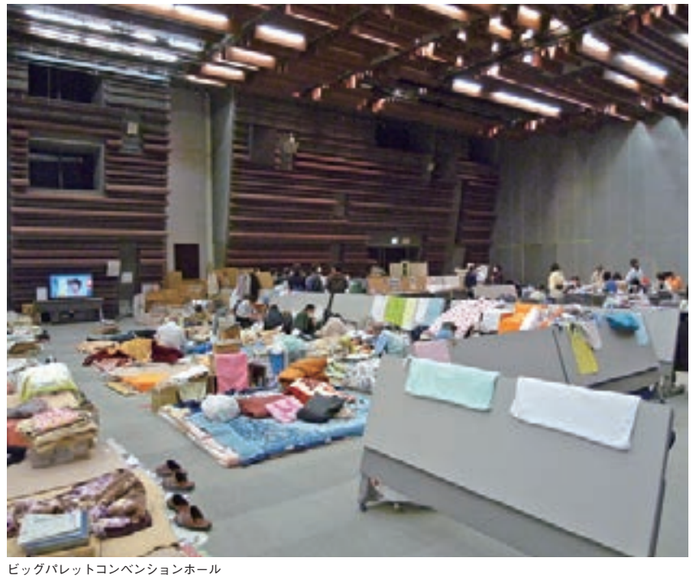
地震発生から６日後の３月17日、当町への避難を希望された158名を乗せたバスが杉戸町に到着しました。当町の公共施設のほか、隣接する幸手市と宮代町にも受入れを要請し、多くのボランティアの協力を得ながら避難所の運営が始まりました。その後、避難者数は一時200名を超えましたが、それぞれ新たな生活の地へと移られ、９月19日にすべての避難所が閉鎖となりました。

当時を振り返りますと、支援していた私たちの方が、富岡町の皆様の声に励まされることが数多くありました。震災から４年、両町の絆はさらに強いものとなり、共に復興、そして発展への道を歩んでいくものと確信しております。引き続き、最大限の支援をさせていただくとともに、一日も早い震災からの復興を御祈念申し上げる次第でございます。

ビッグパレットふくしま

自衛隊員による慰問

廊下にも人があふれた


ビッグパレットコンベンションホール

4 ビッグパレットふくしま避難所

国・県・東京電力の動き

福島第一原発の１・２・３号機の炉心損傷は止まらず、４号機の使用済み燃料プールの危険も続く中、３月17日、ヘリコプターを用いての放水など懸命の冷却作業が本格化、必要な対応が追いつき始める。

３月19日、政府は福島県内の原乳、茨城県内のホウレンソウから食品衛生法の暫定基準値を超える放射線量が検出さたことを発表、２日後の21日には福島県内の原乳の出荷停止を指示する。以降、人々の関心は放射能汚染と安全な食の確保へと移ってゆく。

同24日、第一原発３号機で作業員３人が被ばく、と報じられる。

翌25日、政府は第一原発から半径20～30キロ圏内の住民の「自主避難要請」という指示を発する。

富岡町の動き

ビッグパレット避難所に入って明けた３月17日の朝、館内は避難者であふれ、身動きもとれない状態だった。杉戸町に、帰還するバスに乗れるだけの避難者受入を打診し、快諾を得る。希望者を募り200人を送り出す。

避難所運営の組織づくり、町民および職員の状況把握をあらためて開始。堰を切ったように押し寄せる報道取材にも積極的に応じ、町民からの連絡・情報提供を期した。県内外から支援物資が届けられ、駆けつけたボランティアスタッフの支援が人手不足だった避難所運営の大きな助けとなった。

３月16日、富岡町は川内村と一緒にビッグパレットへ自主避難する。副町長らが先発として入り、受け入れを決めてくれた当時の館長から館内の状況を聞きながら、入館の手順などを打合せた。先に着いていた川内村との兼ね合いで使える場所を確認。館内では、暖房確保のための空調設備の補修措置などが大急ぎで進められていた。

一足先に避難広報を流した川内村民が到着し始めた。続いて富岡町民も続々と集まってくる。ビッグパレットの駐車場がいっぱいとなった後は、郡山市内の青少年会館、青少年センター、郡山自然の家、県農業センター、テクノアカデミー郡山、郡山北工業高校、郡山養護学校などへと案内された。案内された先もいっぱいで、どこへというあてもないまま自分で探して行くほかないという、12日の避難の時の状況がここでも再現された。

杉戸町がチャーターしてくれたバス７台が、川内村の小学校で待つ富岡町民の元に着いたのは夕方だった。いったん出発したあと途中で引き返すなど、連絡の行き違いもあり到着が遅れた。郡山に向けてバス移動が始まったころはすっかり暗くなっていた。

ビッグパレットに集まった人々の受け入れ準備が整ったのは夕方、先に着いていた川内村から入館が始まった。その後富岡町。受け入れ班が住所と名前を１人ずつ確認し、入ってもらった。

当初約2,200名が入り、絶えず出入りがある中、３月下旬が最も多く約2,500とも2800とも数えられる富岡町民・川内村民避難者の、ビッグパレットでの生活が始まった。

養護老人ホーム東風荘に入所していた高齢者グループに、川内村への避難以降付き添ってきた職員は、最初２階に案内された。体の不自由な人も多いので大変だなと思ったが、こういう事態なのだから仕方がないか、と従った。だがその後、１階のコンベンションホールを解放できるとの案内を受け、２階に上げたものを移動し直した。東風荘の看護職員や施設長、施設に入所していた高齢の避難者らが同ホールへと移動した。

こうして2,000人以上がドッと入って、ここを使って、あそこも使えると、それぞれの落ち着き場所を見つけながら、ビッグパレットの館内を埋めていった。

最終的に提供された居住スペースは、コンベンションホール（１階）、展示ホールＢ（１階）、レストラン（２階）、中会議室（３階）など、１階から３階までの使える限りの空間。それでも館内はみるみるいっぱいとなった。いったん落ち着いてからも、場所と状況を見きわめながら入れ替えなどを行った。ビッグパレット職員と町職員による調整がいつまでも続けられた。深夜をまわってようやく入館受付が終わった。それぞれが入れるところに入ったようだと思われたのは午前２時ごろ。通路にまで人があふれ、文字通り足の踏み場もなかった。

気がつくと町職員らの場所が残っていなかった。通路や、町民が居住スペースとして利用するのは困難との理由で避けられた倉庫などに身を寄せて、一夜をすごした。

こうした状況のなか、すぐにここには居られないと感じる町民も出ていた。対策本部からも、チャーターしてもらったバスを空で帰すのはもったいない、杉戸町に避難を受け入れてもらうことはできないかという声が上がった。バスは明日戻る予定で、運転手は市内に泊まってもらっている。

明けて17日、埼玉県杉戸町の避難者受け入れが決まった。とりあえず風呂があるところ、畳の部屋があるところの施設を確保しようという温かい申し出だった。隣の幸手市、宮代町にも施設があるとのことで、４カ所ほどの受け入れ場所を確保したという。この流れを受けて、杉戸町に行くという町民を募った。雑魚寝で一夜を明かした窮屈さから「じゃあ行こうか」と思った人も少なくなかった。当初「２～３日もすれば帰れるだろう」と思っていた気持ちも、ここまで来ると「いつ帰れるかはわからない」に変わり始めていた。約200人が手を挙げ、７台のバスがほぼ埋まった。

杉戸町への出発を前に、乗り込む町民の名簿確認をしていた町職員は知り合いを見つけて「じゃあ、元気でね」と言葉を交わしていた。そこに本部役員があらわれ、「おー、ちょうど良かった。この車に乗って杉戸町に行ってくれ」と言われた。非常事態の中、否も応もなく目の前で起きていることへの対応を続けてきた。これもなりゆき、行くしかなさそうだ。

１時間後、バスに乗り込み、出発した。杉戸町、幸手市、宮代町と、埼玉県内３市町４カ所の避難所が閉じられる９月末まで、総括を務めることになる。

押し寄せたマスメディア

避難所の運営には同行してきた川内村と一体となって臨み、川内村民

すぎとぴあ（埼玉県杉戸町）

すぎとピアでの地元住民らによる炊き出し

エコ・スポいずみ（埼玉県杉戸町）

幸手市老人福祉センター（埼玉県幸手市）

ふれ愛センター（埼玉県宮代町）

居住スペースは段ボールで仕切られた

もスタッフに入ってもらって、体制を構築した。

川内村避難のときにはまったく姿を見せなかったマスメディアの取材が、郡山に来た途端に押し寄せた。訴えたいことはたまりにたまっていた。だが、すぐにやりきれない気持ちにさせられた。

入館間もないころの夜中、テレビ局が取材させて欲しいといって入ってきた。もう23時を過ぎており、避難者は就寝態勢に入っている。だが念のために「みんなとっくにやすんでいるけど、何を聞きたいの」と聞いてみると、余震は怖くないかなど、小学校低学年でも腹が立ってしまうような質問ばかり。思わず「それでなくても不安でいるのに、寝ている人を起こしてそんなことを聞いて何になるのか」と拒否したことがあった。

電話での取材攻勢も殺到し、「電話での取材は受けられない。あなたに説明する前に住民の対応の方が優先なので」と何度も断らざるを得なかった。

しかし断り切れないことも多かった。2,000人以上がまとまっていることがわかると、次々に政府の要人などが訪ねて来る。それにぶら下がるかたちでマスメディアが付いて来る。こうした非常事態の中で、取材のためにはほかのことは構わないというような専横ぶりに直面すると、彼らも仕事とはいえ我慢できないこともあった。本当は伝えてほしいことがある、それを伝えていくのが本来の義務ではないのか。我々がいちばん困っているときに来ないで、ここに来てわが物顔で取材場所を争い、こちらに文句を言ってくる!?——とんでもない。

また、防護服を着てヘルメットをかぶり、防護の眼鏡越しにカメラを構えて入って来たところもあった。遠方から来たメディアだったが、避難者側はせいぜいマスクぐらいのところにその重装備姿。さすがに違和感を感じ、自分たちの格好がおかしいことに気づいたようだったが、その姿格好が住民に与える影響とか考えないのか、脱ぐのが当然ではないのかと、ふつふつと思われた。だが、これに限れば、彼らの方が正しかったのかもしれないという余地があるかもしれない…。

ビッグパレットへの富岡町の避難がマスメディアで報じられると、川内村への避難以来「町」との接触がとれないでいた自力避難した町民からの問い合わせも殺到した。そのためビッグパレットの電話がふさがってしまい、管理に支障が出てきたので、急きょ町の幹部二人の個人の携帯電話が町の窓口として案内された。富岡町の電話が引かれるまでの間、夜昼なくひっきりなしに問い合わせの電話が入り続けた。

自力で避難した町民からは、「富岡町はビッグパレットに避難した」という情報がわからずにいたという声も聞こえてきた。対応として災害対策本部は、少しでも早くホームページなりを立ち上げるべきということで、平成23年４月１日、富岡町の災害用ホームページを開設した。

ビッグパレットでの炊き出し

フロア担当（フロア班）

ビッグパレットにどこの誰がいるのか、正確に把握しなければならない。最初の課題だった。だが、個人情報保護との兼ね合いをどう整理するか、それが「正確な把握」の障害になっていると感じられることが度々あった。今回の震災に伴い、各地で弱者の救助・支援に当たった人たちが少なからず痛感した問題だ。

避難した町民の把握は、川内村に行った時点でも行った。それがさらなる避難で、また振り出しに戻った。自力で新たな避難先を探して行った人も含めて、またバラバラになったからだ。

富岡町の避難所がビッグパレットにできたことがテレビなどで報じられると、川内村に避難していなかった町民も安心を求めて集まってきた。また、双葉町や大熊町、南相馬市、さらにいわき市からもビッグパレットを目指し避難して来た人々も、当初は300人ぐらい混じっていた。

スムーズにいかない避難者情報。たとえば、Ａさんがここにいるが、個人情報がらみでそのことを発信できない。Ａさんの安否を確認しようとしている人は手間取るだろう。

プライバシーの無い空間

Ａさんを探している人が来た場合は、町がＡさんの情報を持っているなら、相手の人の携帯番号など連絡先をあずかってＡさんに「こういう方が来ているので連絡をしてあげてください」とつなぐのだが、この手間も、もどかしかった。

その携帯電話の力の大きさがあらためて認識された避難でもあった。しかし高齢者では持っていない人も少なくなかった。いざ持とうと思っても、着の身着のまま避難したため、必要な印鑑がないなどでなかなか購入できない。それでもなくてはならないと、借りたハンコで携帯を買ったという人もかなりいたようだ。家族同士でもまだ安否確認ができず、探し続けている混乱の最中だ。その混乱のさまざまな狭間に置き去りにされる人を、いかに見落とさず、助け出し、支援できるか。

そのためにも、まずここに避難している人をしっかりと把握し、外で心配している人につないでいくこと。瀬戸際での知恵が試され続けた。

広報とみおか　桜通信［抄］

井戸川奈津美さん［福島市］
2014年４月号

看護師そして母親として…

震災前まで、私たち親子、夫の両親と祖母は同じ敷地内の別棟に生活していました。避難指示を受けて川内村から田村高校を経て、3月15日の午前中には飯舘村にある私の実家に身を寄せました。午後になって同村内が放射能に汚染されていることを知らされたため、実家の両親らと福島市内に住む妹一家にお世話になりました。

数日後、富岡町の避難所であるビッグパレットふくしまに移り３月末まで入所したあと、妹宅に近い福島市渡利地区の借上げ住宅に入居しました。しかし、長男が渡利小学校に通い始めた頃、同地区にホットスポットが存在していることが明らかになりました。

一時は更なる移動も考えましたが、地区内の安全に見通しがつき、幸い、近所に気に入った物件が見つかり、昨年末に転居し現在に至っています。

ビッグパレットふくしまに入所してから、私は看護師として救護所の活動に加わりました。当時は、医薬品や資機材、医療スタッフなど、十分な医療・看護活動を展開するには全てが不足している中、既往症を持つ人の多くが薬を持っていないなど、支援物資の中から 市販薬をかき集め、その成分から代用処方を行うといった状態でした。

避難後、勤務先の訪問看護ステーションがいわき市内で業務を再開し、再び勤務しないかと声がかかりましたが、同市内の住宅事情や子育てなどの事情から、応えることができませんでした。将来のために働くことは必要だと思いますが、今は「母親」として子育てに専念し、未来を託す「子どもたちの将来」に備えようと思います。

少しのスペースを見つけて遊ぶ子ども達

自衛隊員に肩車され無邪気な笑顔を見せる子ども

散髪ボランティア

ペットも大切な家族

個人情報保護がらみでの動きにくさ、やりにくさというものは震災前からあった。顔見知りの間でも越えられない一線。そこを守りつつ、いざというときにそこをどういうふうに越えていくのか。さらにこの原発事故避難のように町村を越える場合、避難者を支援する態勢とどういうふうに融合していくか。個人情報保護を前提とした上で、立場上、人命を守るという時、どういうふうにすればうまくやれるのか、どこで入っていくのか。法的な立場にある職務の権限？　現場に立った一人ひとりが考えさせられた。

ビッグパレット避難所の出入りが落ち着き、担当別に組織した運営が機能し始めるにつれて、避難者の把握・整理が進んでいった。特に救護所とその支援に駆けつけてくれた看護スタッフらの活動がめざましかった。毎日各フロアを回りながら、個人情報として十分配慮した取扱をすることについて避難者一人ひとりの理解を得ながら把握してくれた。医療・看護の専門職が身につけている信頼感と、やってあげているのではなく、させていただいているという姿勢の力だった。避難者の感情はまだまだ高ぶっていて、心の落ち着きも感じられないので、避難者との接触にはこうした接し方が必要だと教えられ、町職員でも共有した。

こうして把握された情報をもとに、名簿が整理されていった。また、４月に入って県から入った支援スタッフを中心に、館内居住者の地図作りも行われ、より的確な支援対応が図られるようになってゆく。

館内の状況や避難入居者についての必要な情報など、活動の成果は毎日災対本部に報告・集約され、会議によって対策として確認・共有が図られた。それを各担当班の毎朝８時から行ったミーティングで確認し、その日その日の活動に臨んだ。

外からの支援はあったものの、避難所運営の核として組織したどの部署も人員不足を感じていた。互いに出来るときに出来ることをやって対処していたが、５月に入って国の財源で人が確保できるとの情報が入った。緊急雇用という形で不足を補えることがわかった。当初は４～５人ぐらいかと見込んだが、結果的に14～15名のスタッフを現地採用することができた。募集は職安にも出したが、避難所にも張り紙をした。期間限定の雇用だったが、職員らスタッフは疲れ切っていたのでこの増員は大きな力となった。

こうして加わったスタッフとも、情報を共有しておくことが大事だった。避難入居者はことあるごとに職員やスタッフを頼りにし、質問してくる。それに対して、できるだけわかるように対応しなければならない。正確な情報を把握し、毎朝のスタッフミーティングで情報の共有につとめた。さらに、スタッフからは、その日にあったことについての報告を、緊急のものはその都度、そうでないものは翌日朝には必ず上げるよう徹底した。

プライバシーもない避難所暮らしの中、避難者同士のいざこざも増えてきた。それに対応するのもフロア班の役回りとなった。

給食班

最初は正確な数がつかめず「何人くらいだから」というところからスタートした。その数は、フロア班や救護班などの活動が進むにつれて確かなものになっていったのだが、猫や犬を連れているというので施設の中には入らず、駐車場の車の中で過ごしていた人たちもかなりいた。正確な数はなかなかつかめなかった。

最初のころ配ることができたのは、パンとおにぎりだった。おにぎりは県からの要請で南会津町の業者がつくってくれていた。それが、大型トラックで夜に届いた。１万個から１万5,000個という数で、このかたちを基本とした給食がほぼ１ヵ月続いた。だが、４月になって気温が高くなると、中には糸をひいたりするものが出始めた。数を揃えるために作ってから置いておく時間もあったろうし、配ってからも１日ぐらいたってしまう場合もあったためと思われた。

全国から駆けつけた保健師や栄養士がそんな給食を見て、この栄養ではだめだと心配していた。しかし、あてがいぶちの給食、人数も多いため、すぐに自主的な対応をすることは難しかった。

給食の手配を、５月１日からは町が直接行うことになった。県が１人当たり１日1,500円の食費を支援するので自前でやってくれとのことだった。給食班としてどれだけのことができるか、とにかくやってみようということで、まず供給先を探した。

最初に当たったセブンイレブンで、１日１回の弁当供給が確保できた。それを夕食にあてることにした。その後２食分を弁当給食できるようになった。

一方、支援物資として届いているカップ麺や汁物を供給出来るようにするため、敷地内で火を燃やす許可を取り、弁当供給の会社から大鍋を借りたりしながら、ビッグパレット敷地内での炊き出しを実現した。燃料は、担当職員のつてをたどって、郡山チップ工業に頼み込み、提供してもらった。活かせる支援物資は何か、物資班と確認し合った。炊き出しボランティアを受け付けるなど、一時は寝る間もないような忙しさだった。

当初2,000人以上いた避難者は、その後の移動もあり、やがて1,500前後で落ち着いた。それでも大所帯であることに変わりはなく、炊き出しボランティアの申し出もありがたかった。ボランティアの申し出はビッグパレットに集中していたので、市内の他の避難所の状況を見て、そちらでの実施をお願いすることも少なくなかった。

６月に入って仮設住宅の入居が始まると、同じビッグパレットの近隣敷地に設けられた仮設に入った住民の中には、その後も給食を受け取りに来る人がいたが、給食数は徐々に減っていっ

たくさんの人々が炊き出しに訪れた

富岡町の皆さまに
- message -

郡山市長
品川　萬里

富岡町の皆様におかれましては、東日本大震災発災以来、今もなお全町避難をされており、御苦労が絶えないであろうことと心中お察し申し上げます。

震災当初は、本市にあるビッグパレットふくしまが避難所となっており、ピーク時で約2,500人もの方々が避難されておりましたが、避難生活の長期化が見込まれ、さらには、貴町が町機能の拠点を本市に構える意向を示されたことから、仮設住宅や仮役場、町立養護老人ホーム用地確保のため、本市市有地の無償貸与など協力させていただいているところです。

また、原発避難者特例法に基づき、避難元市町村である貴町として実施困難な教育・福祉・医療の一部事務を代行しているほか、ごみ処理や健康相談など身近な生活支援を行い、できるだけ本市市民と同じような生活が営めるよう配慮しております。

ふるさと富岡町への思い・富岡町民の誇りは、今も皆様の胸に溢れんばかりだとは存じますが、本市で過ごした日々も少なからず皆様の人生の一部分でありますことから、今後も、郡山市に住んでよかったと皆様に感じていただけるようなまちづくりに努めて参ります。

結びに、震災により長期避難をされている皆様の御健康と、１日も早い富岡町の復興を御祈念申し上げまして、富岡町の皆様へのメッセージとさせていただきます。

段ボールで仕切られたわずかなプライバシー

た。

また自衛隊をはじめ看護師やボランティアなど、支援に入ってくれている人たちの人数も把握してその分も確保しなければいけない。余っていた古いパンなどを職員に配り、新しいものはそうした支援に来てくれた人たちのために確保した。

物品管理（物資班）

支援物資の受け入れと整理、保管・管理、そして配給などを担当した物資班だが、ビッグパレットに入った直後は時間に翻弄された。支援物資が届くのは何時ころとの連絡はあったものの、道路事情が悪く大幅に遅れることが多かった。昼夜関係なく、午前３時とか、５時とか、不定期に届くというのが実態だった。それに対応するため、１週間から10日くらいは２時間ぐらいの仮眠しかできないような状態だった。しかも、寝る場所がなくバスの中に寝るのだが、寒くて目が覚めてしまう。そうこうしながら２人ずつの２班、４人での体制を組み、そこに東京電力からの支援が７～８人加わって物品の受け入れ整理に臨むという体制ができていった。

県本部からの物資が届く予定だがなかなか入らない、送った・送らない、何が足りない、その連絡はいただいてないなど、そんなことも何度かあった。

どういった物がいくつあるか。数量がある程度まとまったら避難者に配布する。そのため何が入ってきて、どれぐらいの数になっているか、整理しながら記録し、常に把握しておく。ビッグパレットのＡホールに、わかりやすく分別して整理していったが、物が増えていくにつれていったん整理したものを移動するなど、整理が追いつかない。最初はここもまた殺到ずくめだった。

支援物資の整理

物資は10トン車で届く。それを手で降ろさなければならない。昼間は避難者の中からもボランティアの手が借りられたが、深夜となるとそうもいかなかった。

物資の保管場所は照明などが落下した場所なので、居住スペースから外した所だった。机などでバリケードを設けて安全を確保し、使用した。後にはそこが、物資班や他の職員のねぐらともなった。

物資については、避難者から「何がほしいんだけれども」という要望が出ることもあった。しかし、基本的に全員に対応できる十分な数がないと、もらった・もらわないの騒ぎが心配で、あっても配るのがためらわれた。衣類にしても、男物なら1,000着くらいにならないと配布できない。途中で「これで終わりです」とは言えないと思った。そんなことから、物があることを知った人から「なぜ配らないんだ」という声を受けたりもした。

また、ビッグパレットが中心ではあったものの、避難所はほかにもいくつもある。各避難所に入っている職員と連絡を取りながら、足りないもの、必要数などを聞いて、ある程度まとまったら送ったりもした。三春町は三春町で、入ってきた物資を避難所に回したりしていたが、それでも足りない場合もあった。その状況を互いにやりとりをしながら出来る限りの対応をした。三春町の避難所などでは、三春町の支援を受け自分たちで食事を作ることができるところがあったが、郡山にはなかった。米や野菜が送られてきたときには、自炊している避難所に送った。

要望品の中で多かったのは、マットレスだった。床に寝起きしているのだから、それはもっともだった。しかし、数はごく限られていた。とりあえず高齢者や体の弱い人に配っているんですよ、と理解を求めた。「俺も悪いところがあるんだよ」と言われても、我慢してもらった。

毛布は国から届いたものが、１人１枚行き渡っていた。ほかにもだいたいの必要品は行き渡っていたと思う。だがマットレスは、さすがに少なかった。もし、何カ月もいなければならないとあらかじめわかっていたら、声も上げられたかなと、今なら思う。

どうしてもベッドが欲しいという人がいて、結果的になんとか提供することができたという例もあった。

物資の管理・配布はビッグパレット避難所として、富岡とか川内とか関係なしに一括で対応した。だが、数としては大半が富岡町民だったので担当は富岡の方でやっていた。いずれにしても数が多いため、公平に配るということでは苦労した。中途半端で配り始めたら「早く並ばないと」とか混乱を招いてしまう……。それが心配だった。しかし時間が経つ中で避難者も落ち着き、小言はだいぶあったもののトラブルというほどのことは起きなかった。

送られてくる物資は、後半の方になると個人からの支援が結構多くなった。衣類が多かった。古着。これを振り分けるのは大変だった。郡山市民のボランティア十数人が、毎日その振り分けをやっていた。古くてどうかなというものもかなりあり、避難者に回せないと判断されるものの処分も気が重かった。支援物資についての現実だった。一方、メーカーや大手企業、芸能人などからの物資は新品が多かったが、内容の数や大きさはまちまちで、やはり振り分けは必要。男女、サイズで分けて、数をだいたいまとめる。それを朝から終わるまで十数人で行う。それを見ていると、何かうまい方法はないのかなと思われるのだが、見つからなかった。

仮設住宅に移っていった後の避難所に、そうした配布物資がかなりの数、置きっぱなしにされていた。

ひどく割り切れない思いがした。

救護班（救護所／診療所）

３月11日、災対本部となった「学びの森」の１階に津波被災者などの避難者を受け入れた時点から救護対策の中心となって動いていた職員と保健師グループは、ビッグパレットに入った翌朝、救護所を設営しようとしていた。取り急ぎ、健康相談窓口という程度のスペースを空けてもらった。駆け付けてくれた横浜みなと赤十字病院のＤＭＡＴ（災害派遣医療チーム）など支援の医師らがその動きに合流。19日の夕方までには富岡町で開業していた医師らも合流、診療体制を講じ始めた。ＤＭＡＴは金沢大学や東邦大学など５チームぐらいが入って、初期の救護活動をサポートしてくれた。

医療スタッフによる巡回

救護所は大混雑となった。一番の要望は薬だった。普段飲んでいたものを持って来なかった、持っていた薬が無くなったなど、200人から300人ぐらいがやってきた。だが当時あったのは市販の薬が少しと、川内村にいた間に調達したもの。そこに富山県などの薬剤師会からの支援で風邪薬や胃腸薬など

ビッグパレットふくしま内

ビッグパレットふくしま臨時診療所

ビッグパレットふくしま内

の市販薬がどっさり届いた。治療が必要ではない人たちには、これらの薬を出してその場をしのいだ。しかしこれではどうにもならない、と思った。そこに富岡の医師たちが駆け付けてくれた。ホッとした。これで救護所の運営体制が整った。

医師チームは19日からラウンド(巡回診療)を始めた。避難者がいる１階から３階まで、全部見回った。かかりつけの医師の顔を見て、体が弱っていたり持病を抱えたりしていた町民は安堵することができた。特に家族がいない、車がない人などにとって「この中に先生がいる」という安心感は大きかった。

医師たちは、それに応えて館内で治療活動ができるようにするため、「臨時診療所の開設」を県に要請した。19日、許可されたとの報があった。救護所は診療所としての体制を整え、組織を充実させていった。治療活動の核となるボランティア医療班の立ち上げに当たって必要なスタッフを館内放送で呼びかけると、看護師１人、薬剤師１人が応えてくれた。３人の医師と合わせてこの５人によるボランティア医療班が編成された。

後に2,500人前後に落ち着いた避難入居者の数は、当初はさらに多く、医師の手元には2,700人というメモが残っている。ボランティア医療班だけでは対応しきれない。駆け付けてくれた一部のＤＭＡＴも、救急の処置が必要な災害外傷の避難者がないのを見届けると戻っていった。

そんな中、郡山市の星総合病院長の出身先ということで入ってくれた東邦大学のＤＭＡＴは、スタートしたばかりのボランティア医療班の支えとなってくれた。４月に入って６月までの期間は、県に要請して派遣してもらった日本医師会のＪＭＡＴ(日本医師会災害医療チーム)のサポートを受け、各地避難所の巡回も含めて協力連携し活動した。

ＪＭＡＴは、日本医師会が割当て調整したスケジュールに従って、各地の病院から計画的に派遣された。それらのチームの数はＤＭＡＴとＪＭＡＴを合わせ25チームに上った。６月いっぱいその支援を受け、その後は原則的に地元チームで継続した。それでも８月31日の避難所閉鎖まで、内外各地の病院などからの支援があり、ボランティア医療班に協力して動いてくれた。

当時を振り返って地元医師らが「非常に感謝している」と強調するのは、こうして入ってくれた医師たちが地元医師が出した方針に全面的に協力してくれたことだ。毎朝夕のミーティングで確認し合っていたのだが、その際外からの支援者が地元医師の考えをほぼ全面的に受け入れて動いてくれた、地元主流でやれた、それがトラブルもなく運営がうまくいった最大の要因だったと。

その方針とは「ビッグパレットの中で死亡者を一人も出さない」こと。そのための診療体制、やり方を、常に考え続けた。

第一の主眼は、入居している全員一人ひとりの健康状態をしっかりと把握すること、具合の悪い人と健康な人とを分けることだった。ざっと見ただけでも、認知症から手術の必要そうな人までさまざまだった。本当に加減が悪そうで、酸素吸入している人もいた。そうした重度の患者を避難所の中で診療し管理することはできない。その見極めをするのが大事だと考えた。そのためには一人ひとり、顔を見ながら回るしかない。ボランティア医療班の医師が１日交代で全館民を診て回り、具合の悪そうな人をリストアップしていった。そして、中では対応しきれない問題がある人には入院してもらうように、早期対応につとめた。

いわゆる外来対応となる診察室の方は、ＤＭＡＴ・ＪＭＡＴの医師らと３人の地元医師で交代で対応した。まず保健師ブースに入ってもらい、問診で状況を聞き、診察ブースで診察して、薬を出してもらう。郡山の薬局２カ所が応援に入ってくれていて、色分けした薬のシート(一覧表)をつくっておくなど工夫して対応し、運営は順調に流れた。

薬は当初、保健所や病院からの支援、医療ボランティアの人たちが持ってきてくれたものを使っていたが、診療を始めて処方に応じた薬が必要となると、県の災対本部を通じて申し込まなければならなかった。まず手続きありき。しかし通信網が不安定だったりまだまだ混乱の最中という時期には、手書きした注文書のファクスが届かない。何回かの自動送信もつながらず未送信レポートが出ているのを深夜に届けてくれる人がいて、また２時、３時まで再送信。イライラしながら「直接薬を持ってきてくれる薬屋さんはわかっているんだから、どうしてそちらと直接やれないのか」とうらめしく思ったりさせられていた。

震災前から通院中だった人からの

広報とみおか　桜通信[抄]

吉原朝男さん[いわき市]
2012年７月号

自宅から救出された災害弱者の兄夫婦

私は現在、妻と兄夫婦とともに、いわき市内の借り上げ住宅で生活しています。この場所は、娘の嫁ぎ先が所有する借家なため、避難後、それほど経たないうちから、こちらでの生活を始めることができました。

私たち夫婦は、避難指示が出てからすぐに避難することができましたが、兄夫婦とは連絡がとれず、しばらくの間、その所在を探し回ったり、伝言板にメッセージを託したりして再会を待っていました。

震災の発生から約半月後、兄夫婦が富岡町内の自宅から自衛隊により救出され、ビッグパレットふくしまに収容されたとの連絡が入り、早速、迎えに行き、現在に至っています。

兄夫婦は、高齢のため、車の運転もできず、いわゆる「災害弱者」です。救出されたときは、食べ物も底を付く状態だったということです。命が助かったことは不幸中の幸いでした。

私はこどもたちにソフトボールの指導をしていました。特に、６月は、中体連の試合があるなど、とても忙しい季節でした。しかし、震災後は、町内での試合もないため活動することはなくなってしまいました。また、県の競技団体で役員にも就いていましたが、震災後は離れてしまいました。現在も、審判員としての登録だけはしておいています。

現在生活している借上住宅の前には小学校があります。そのグラウンドで、時折、小学生がソフトボールの練習や試合を行っていますが、今は、そんな姿を見て、富岡での日常を懐かしむ日々です。

またいつか、みなさんの元気とともに、活動を再開できることを願う日々です。せめて、健康だけはと心がけています。

「もらっていた薬と違う」という訴えは避難当初からあったが、診療所で処方を始めてからもそれは消えなかった。医師らもそうした患者に安心を持ってもらうにはここでは限界があると判断、郡山医師会を通じて５カ所ぐらいの病院で受け入れてもらうよう依頼した。巡回バスで送り出すと、「新患をいっぺんに12人もよこされては困る」と注意された。さらに少なく分散したり、自分で行けるならこの病院でなくてもいいことを話したりしながら、自分で行くという人を増やすようにしていった。

感染性胃腸炎対応（ノロウイルス）

ビッグパレット避難所内で、感染症の発生が２回あった。いずれも重症化させずに乗り切ることができた。

最初はインフルエンザだった。３月下旬に１人のＢ型インフルエンザ患者が出た。富岡町民ではないこの患者の自宅住所を聞いてみると、帰ってもよさそうな地域だった。隔離するため、薬を処方し、家に帰ってもらった。その後インフルエンザは出なかった。

４月10日、下痢・嘔吐の人が多数出た。ノロウイルス感染者だった。９日夜から「吐いてしまって…」という訴えが続出し、救護班の夜勤担当が悲鳴を上げていた。

すぐに県にＳＯＳを出すと、それまでに支援に入ったことのある医師などが戻ってきてくれ対応を支援してくれた。広島県、北海道、山梨県などから駆けつけ、夜はここにいるからと控えてくれた。福島県の保健所勤務のドクターも１人来ていたので、そこから県と郡山市の保健所に連絡を取り、県中保健所が常駐してくれることになった。

ちょうどこのころ、北海道の公衆衛生班チームが支援に入っていた。保健スタッフとドクターなど、６人ぐらいのチームだった。先頭に立ってトイレ掃除を始め、必要なさまざまな対応を決めていった。それまで原則トイレ内まで同じスリッパで出入りしていたのをすべてやめ、支援物資の中から専用のスリッパを置き、履き替えを徹底した。

また、関西方面から交代で支援に入ってくれるようになっていた１チーム３～４名の看護師チームも、大きな力となった。

そのほか東電病院など、各地から駆けつけた支援チームが連携して、ビッグパレット内のトイレというトイレを掃除してくれた。専門職の組織的行動力の凄さが、心から頼もしかった。

救護班は、川内村と富岡町の保健師、看護師の資格を持っている人と、事務職とで構成されていた。すぐに衛生管理の対応を図り、トイレ掃除、スリッパの交換、アルコール消毒、使用済みのペーパータオルの入れ物設置、手洗い、うがいなど、拡大予防策の励行を徹底させた。

一方、症状のある人は感染症観察室にまとめて、診療対応した。診療に当たったのは、そのときに入ったＪＭＡＴのボランティア医療班だった。

衛生環境の保全のため、ビッグパレットスタッフも換気に力を入れるなどで連携した。

患者は症状の程度でＡ・Ｂ・Ｃの三段階に分け、薬は症状に応じた「約束処方」をつくってさばきを良くした。一人ひとりに合わせるのでなく、症状に合わせて出す薬をあらかじめ袋詰めした腸炎セットを、何日分と決めてつくり、どんどん渡していったのだ。点滴はできなかったので、OS-1という経口補水液を渡した。

このときの約束処方の考え方が、ビッグパレット診療所の救急対応の手法となったといえるかもしれない。訴えのあった症状ごとに引き受けてくれる病院を見きわめてゆき、面倒なことをできるだけ省いて治療につないでゆく。そういう取り決めをして、徹底したこと。重症な患者はすぐに救急搬送したこと。

こうしたすべての連携が功を奏し、感染性胃腸炎は拡大することなく10日間ほどで収束した。確定２人、疑いが数十人という結果だった。交代でずっと来てくれていた山梨県の甲府病院チームは、帰還に際してこの避難所の惨状を置き去りにするのは忍びないと感じ、「何か欲しいものはないか？」と言ってくれた。「ゴム製のスリッパを送ってください」と頼んだ。それなら洗えるし長持ちもする。間もなく大量に送ってくれた。トイレ用に活用した。

「ビッグパレットふくしま避難所におけるこうした医療救護の初期対応は、かなりうまく迅速にできたと思います。だからこの中で亡くなった方は一人もいません」。救護班診療所の中心となって活動した地元ボランティア医療チームの自負とするところだ。

この騒動の最中に支援に加わったスタッフから、ビッグパレットの中の地図を作ろうという提案が出た。どの場所に誰がいるかという地図。それまでの避難所運営の中で痛感していたことだった。名簿づくりはしていたが、名前を聞くと「何でそんなこと言わなきゃならないんだ」という人もあり、把握しきれない部分が残っていた。「県の災害対策本部からのお願い」というかたちであらためて、居場所ごとの調査を実施し、それを元に地図を起こすことになった。

このとき、支援の看護師チームが毎日、ビッグパレットの１階・２階・３階まで健康チェックを兼ねて回ってくれ、移動の有無を確認、それをもとに地図を更新していった。どこに誰がいるか、どの部屋が空き始めているかなどが、一目瞭然でわかるようになった。

町に残っている住民の救出・捜索

ビッグパレット避難所に入って３日ほどが過ぎて、町民自身による安否確認も進んでくると、他の避難所も含めて確認の取れない町民の存在が浮かび上がってきた。それは家族ではなく、同じ地区の隣人などから「この人がまだいない」という問い合わせであることが多かった。

飼い主の避難により家畜が野生化し町内をさ迷った

また川内村にいるころから、津波被災関係者からの「流されてどこだかわからない、行方不明だ」という訴えや、行方不明の人についての問い合わせがあった。再度の避難のため中断していた現地捜索を再開した。年配の職員が輪番で毎日富岡町に入り、これらの町民の状況確認をする。自衛隊または消防団と一緒に、「救出に入る」というかたちだった。３月18日からスタートした。

朝８時半ころ自衛隊の貨物車に乗りこんで出発。車両は５台か６台で、水とパンを積み込んで、現地を目指す。職員は道案内役だ。途中、船引で防護服を着用して行くのだが、富岡町に入るのは２時くらいになってしまう。30キロ圏内に入ってからは、１キロおきに止まって線量を測り、無線で連絡しながら進むためだ。全面マスクもして、日中の気温が上がってくると、ゴーグルが曇ってきて……。

全町避難ということで町を出たが、どうしてもその流れから外れてしまった人や情報が届かなかったなどで、まだ町内に残っている人がいた。「逃げない」という人、逃げ忘れた人、親が寝たきりで逃げられないという人――。自分で動けず逃げられなかった人は救出した。各家を回ってその状況を確認しながら、残っていた人には話をして避難をすすめた。初めて入った日は約20名くらいの町民を連れ出した。

回ってみて最も多かったのは、情報がなかったという人だ。全然連絡がなく、周りの人がいなくなったと思っていたという人もいた。逃げなくてはならないということを理解していなかった。何が起きているのかの意味がわからない。私たち自身、今になってさえわかっているのかわからないぐらいの話だし、まして放射線に色がついているわけでもない。ただ、周りに誰もいないというのはわかっていたと。強制的に連れ出すわけにはいかないので、余分に持って行った水や何かを置いて、ひとまず引き下がる。

そのほか、牛や動物を飼っていて一緒にいないといけないという人。何度訪ねてもうんと言ってくれない人には、身内の人を教えてもらって自衛隊の衛星電話をつなぎ、直接話をしてもらうなどした。

津波地区での捜索も一通り行ったが、当人の自宅まで行ってみようにも、電線やガレキなど津波直後の凄い状態で、確認のしようがなかった。現地に到着するのも、自衛隊の指導を仰ぎながらやっとという状況だった。

この救出・捜索は行って帰るだけで重労働だった。１回目では、自衛隊員もくたくたに疲れていた。それもあったのだろう、自動車道の降り口を乗り越して須賀川まで行ってしまい、夜も開いていた郡山総合体育館のスクリーニング場に着いたのは深夜０時になっていた。

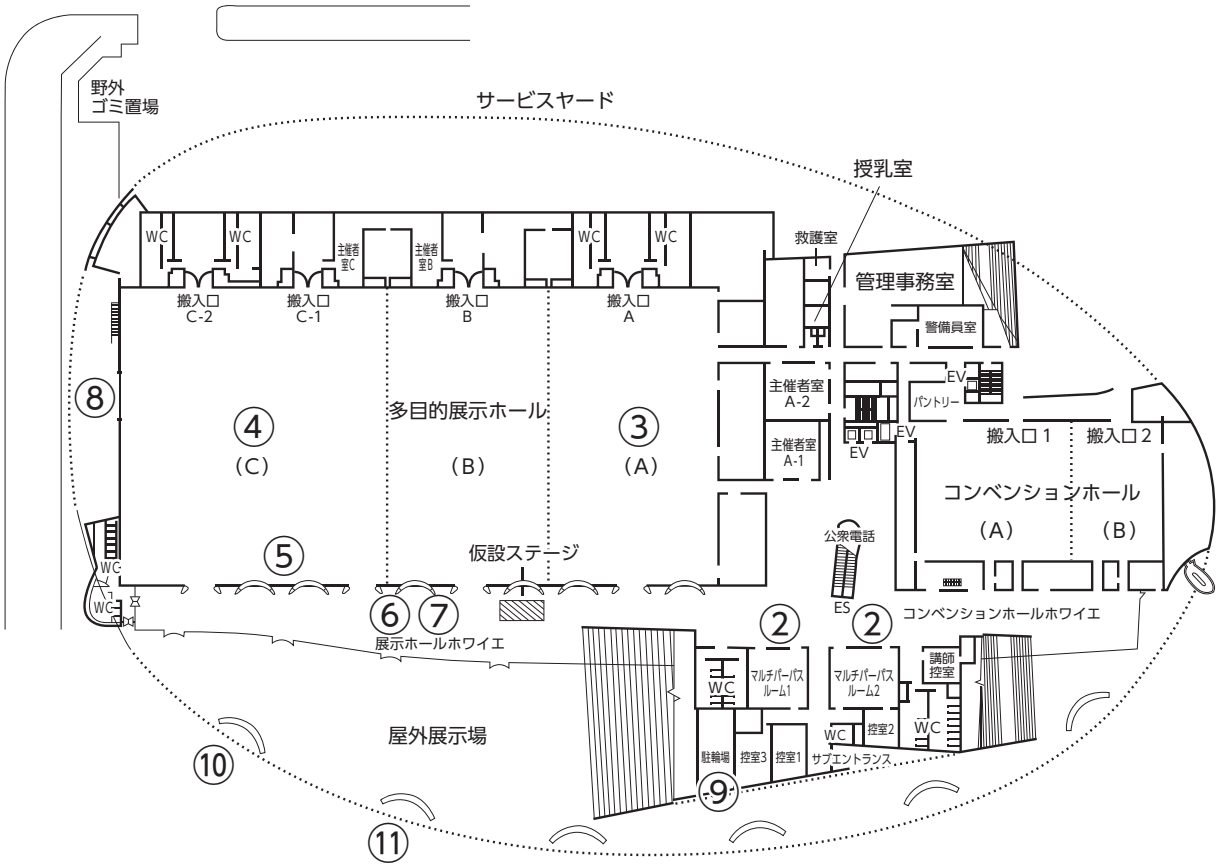
トラックのような自衛隊車両で運ばれてきた20名ほどの町民は、寒い中、水で頭を洗わせられたり、手を洗わせられたりした。それからビッグパレットに案内してはみたものの、彼らが入るだけのスペースがない。やむなく給食を配っていた場所を提供して、毛布を渡し、休んでもらった。

この間に体調を崩す人も出た。救急車で搬送してもらった。

全町避難により人の気配が消えた岡内地区

ビッグパレットふくしま避難所フロア図

［資料提供：ビッグパレットふくしま］



避難所施設運営等の状況

平成23年７月26日現在

施設の区分	場　　所	運　営　等
①居住スペース（１階～３階）	コンベンションホール（1階）、展示ホールB（１階）、レストラン（２階）、中会議室（３階）等	・消灯時間：22時
②救護所（１階）	マルチパーパスルーム　講師控室等	医師１名、歯科医師１名、看護師、保健師、薬剤師等が約10名常駐 ・開所時間：８時30分～21時
③救援物資倉庫（１階）	展示ホールA	・朝食：７時　パン、飲物 ・昼食：12時30分　弁当、飲物 ・夕食：18時30分　弁当、飲物
④各種相談コーナー（１階）	展示ホールC	町、村、国、県等の相談コーナー、県立図書館、郵便局コーナー等
⑤おだがいさまセンター（１階）	展示ホールC	富岡町社協、川内村社協等が運営 ※ボランティア約30人（平日）
⑥郡山警察署臨時派出所（１階）	展示ホールホワイエ	郡山警察署、県外の警察本部・皇宮警察（輪番）による24時間駐在
⑦ミニFMラジオ放送（１階）	展示ホールホワイエ	おだがいさまセンターが運営 ・放送時間（平日）：19時～21時
⑧犬・猫ペットコーナー（屋外）	展示ホールCの北側スペース	犬用テント２張り　猫用テント１張り
⑨洗濯室（屋外）	自転車置き場	洗濯機32台、乾燥機20台を配備 ・利用時間５時～22時
⑩浴場（屋外）	屋外展示場	陸上自衛隊練馬部隊（10名）設営 ・入浴時間：14時30分～21時
⑪仮設役場庁舎（屋外）	屋外展示場	富岡町役場、川内村役場